



都市祭礼の近代化とローカル・アイデンティティの  
形成：  
大阪道修町の神農祭における「造り物」文化の変容  
を事例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪公立大学大学院文学研究科都市文化研究センター 公開日: 2024-10-09 キーワード (Ja): 道修町, 神農祭, 都市祭礼, 造り物, ローカル・アイデンティティ キーワード (En): Doshomachi, Shinno-sai Festival, urban festival, Tsukurimono, local identity 作成者: 久本, 拓弥 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/0002001278">https://doi.org/10.24729/0002001278</a>

◇研究論文◇

# 都市祭礼の近代化とローカル・アイデンティティの形成

—— 大阪道修町の神農祭における「造り物」文化の変容を事例として ——

久本 拓 弥

## ◆要 旨

本稿は、今日においても近世以来の医薬品産業の同業者町としての性質を保持している大阪市中央区道修町について、同町の少彦名神社の例祭である神農祭に注目し、特に明治期以降にこの祭礼がどのように変容し、それが道修町における地域の独自性、すなわちローカル・アイデンティティの形成に寄与してきたのかを、これまで紹介されてこなかった資料の検討に基づいて明らかにするものである。

明治期の神農祭に関しては、近世以来、薬種商の仲間内で行われていた祭礼が、1880年に薬品関係の品々を用いた「造り物」を商家の店の間に飾り始めた頃から、次第に一般大衆が参加する社会的な祭礼へと変化したことを確認した。その要因としては、薬種商有志が設立した神社の崇敬者団体である薬祖講が、薬草などを用いた人形を飾り、多くの見物人を集め、祭礼を盛り上げようと意図したことが考えられる。

また、明治末期から昭和初期の神農祭に関しては、『薬石新報』の記事に基づき、「造り物」の題材や設置場所、材料などの実態を明らかにした。1920年からは、それまでの薬草を使った「造り物」は廃止され、材料に企業や商店の商品が使われるようになり、商品宣伝を兼ねた広告物としての要素を含むものとなっていった。これは、業者中心に対応していた業界の業務内容が変化し、一般客への宣伝の必要性から多くの参詣人を意識した結果、もたらされた祭礼の変化であると考えられる。

このように、近代の神農祭、特にそこで展示された「造り物」の変質を確認することによって、急速な医薬品産業の近代化に直面した道修町の薬種商が地域の独自性、すなわちローカル・アイデンティティを主張するために、どのような戦略を取ったのか、その一端を明らかにすることができた。

キーワード：道修町、神農祭、都市祭礼、造り物、ローカル・アイデンティティ

## 1. はじめに

大阪市の中心業務地区である船場地区は、近世には大半が商店を中心とした町人地で占められており、その各所には、同一業種の商人が集住する問屋街（同業者町）が形成されていた。中でも道修町は、近世に日本の薬種流通の中心地として栄え、現在も多くの製薬会社の拠点が立地する。

また、かつて株仲間の寄合所が置かれた場所に鎮座する少彦名神社は、薬の神様として知られ、健康や病氣平癒を願う人々の信仰を広く集めており、その例祭である11月22日・23日の神農祭<sup>1)</sup>は、大阪の1年を締めくくる「とめの祭り」として、毎年、大勢の参拝者で賑わう。2007（平成19）年には、「少彦名神社の薬祖講行事」として、大阪市の無形民俗文化財に指定された。

近代の道修町の医薬品産業に関しては、これまで網島（2012）による歴史地理学的な研究や山下（2010）、張（2013）、安士（2015）らによる経営史的な研究が

ある。また、少彦名神社の神農祭に関しては、加藤（2007）や小林（2008）らによる同業者の信仰を対象にした研究があるが、いずれも祭礼が同業者町の存続において果たした役割については明らかにされていない。

そこで、次の理由から、本稿では、急速な医薬品産業の近代化の中で、神農祭が道修町の地域の独自性、すなわちローカル・アイデンティティの形成にどのように寄与してきたのかを、これまで紹介されてこなかった資料の検討に基づいて考察する。

ローカル・アイデンティティは、地域活性化や地域再生の文脈で使われることが多い用語であるが、これまでいくつか別々の意味で使用されており、確定的な定義が存在するわけではない<sup>2)</sup>。大堀（2010）は、ローカル・アイデンティティのこれまでの使用例として、個人レベル（個人にとっての地域に対する帰属意識）と、集合レベル（地域関係者の多くに共有されている地域内の要素）の2種類に分類しており、用語の曖昧さを回避するためには、使用にあたってどちらの水準なのかを明確にする必要があると指摘している。

そこで、本稿では、ローカル・アイデンティティを集合レベルで用いながら、道修町の神農祭を分析することとしたい。大堀（2010）は、ローカル・アイデンティティの集合レベルでの使用例として、武田（1999）の論文を挙げており、そこでは、ローカル・アイデンティティが「地域全体の特性」、「地域の個性」を意味する用語として使用されている。

本稿で取り上げる道修町の神農祭は、当該地域に集住する薬種商が薬祖神として信仰してきた少彦名神社の祭礼であり、神社という人々の精神的な拠り所になっているものが、同業者集団の意識をまとめる役割を果たすことから、集合レベルでのローカル・アイデンティティ概念を用いて分析することが適切であると考えられる。

なお、本稿では、『道修町文書』のほか、これまで紹介されてこなかった資料として、『大阪薬種業誌』、『薬石新報』などを検討する。『道修町文書』は、かつて株仲間の寄合所が置かれた少彦名神社に伝来した1658（明暦4）年から1944（昭和19）年までの薬種商組織にかかわる文書群であり、2007（平成19）年には「道修町文書一括」として大阪市有形文化財に指定されている。『大阪薬種業誌』は、『道修町文書』の一部を翻刻し、1935（昭和10）年から1941（同16）年にかけて4巻に分けて刊行された資料であるが、中には『道修町文書』には現存しない文書も収録されており、『道修町文書』に残されていない資料については、『大阪薬種業誌』を参照した。『薬石新報』は、1889（明治22）年に大阪で創刊し、旬刊で発行された医薬品業界紙である。売薬商の安東忠次郎が社主を務め、後に医事日報社に継承された。

## 2. 明治期の神農祭と「造り物」

道修町の薬種商は、享保年間（1716～1736年）に幕府より株仲間（薬種中買仲間）を組織することが認められ、和薬や唐薬の品質を検査し、価格を決定して全国の薬種業者へ売り捌く機能を担っていたが、明治期に入り、株仲間の解散や洋薬の取り扱いの開始といった新たな課題に直面することになった。特に株仲間の解散は、それまで道修町の薬種商が持っていた薬種流通における特権を揺るがす大きな出来事であった。道修町の薬種中買仲間は、1752（宝暦2）年に道修町1～3丁目に居住することが義務付けられ<sup>3)</sup>、諸薬種を独占的に全国に供給していたが、1872（明治5）年に大阪府の布達により薬種中買仲間が解散されてからは、個人の営業権が認められ、新たな事業者が参入することが可能になった。

また、その薬種中買仲間が1780（安永9）年に京都

の五條天神社から勧請<sup>4)</sup>し、仲間寄合所に創建した少彦名神社の社殿の維持管理や祭礼にかかる費用は、近世では株仲間から、株仲間解散後には薬種商組合<sup>5)</sup>の組合費と寄附などから支出していたが、1884（明治17）年からは、「将来にわたって滞りなく祭典を執行するため」<sup>6)</sup>に薬種商有志が設立した神社の崇敬者団体である薬祖講の積立金から祭礼の費用を捻出することになった。

道修町の薬種商である島道素石は、1932（昭和7）年に発行された『郷土研究 上方 第二十三号』の論考の中で、

「年々の祭典には会所の座敷が社務所にも神楽所にも兼用され、薬祖講といふ薬業仲間のみによつて組織されてゐる講金と寄附金とで執行さるゝのであるが、資金は豊富なものだ。明治十八年の建野知事時代に同業者の団体は不必要だとの見解に寄合所は閉鎖されてしまった。其後又集団が認められ大阪商業会議所も設立さるゝに及んで復活し五名の理事と三十名の評議員を選出し大に時代に適応せしめた。此変遷中にも祭典は絶へさなかつたのである」<sup>7)</sup>

と述べており、1885（明治18）年に一時的に薬種商組合の寄合所が閉鎖された際や、1890（同23）年に大阪商法会議所が解散し、1891（同24）年に大阪商業会議所が設立され、会議所議員の選挙が行われた際も、祭礼は継続されたことを強調している。

さらに、同じく道修町の薬種商の小西久兵衛は、1933（昭和8）年に掲載された医薬品業界紙『薬石新報』の記事の中で、

「今でこそ神農祭に出す虎が十三万といふ莫大な数を見せてゐるが明治十七八年頃は堺筋に僅か鮎屋が二軒出てゐるきりといふお祭で参詣者も極く少なかつた。（中略）然しこんなことでは不可ない。何とかお祭を賑かにせねばと言ひ出されたのが二十二年頃一明治二十九年に私が取締で第一回をやつた時の祭典費用が八百九十円かゝつた。虎は一個三厘五毛でこしらへた。第二回は明治三十六年、私が副取締の時であつたが、この時の費用が千四百円、虎も一個四厘で三万以上を出すやうになつた。去年の祭典には三千五六百円かけたとかに聞いてゐる」<sup>8)</sup>

と述懐しており、明治初頭の神農祭は、露店や参詣者が極めて少ない小規模な祭礼であったことがうかがえる。そうした中、1884（明治17）年に薬祖講が設立され、1889（明治22）～90（同23）年頃から「何とか

お祭を賑かにせねば」という機運が薬祖講の祭典委員の間で高まり、祭礼に係る費用や名物の「張り子の虎」<sup>9)</sup>の配布個数が増加していった。

それでは、その「張り子の虎」と並ぶ名物として、近代の神農祭に登場した「造り物」についてみていきたい。「造り物」は、都市あるいは町場の祭礼行事において、町家、街路などに固定的に設置される造形物であり、近世大坂における「造り物」の歴史については、相蘇一弘による詳細な研究がある<sup>10)</sup>。近世の大坂では、天明年間（1781～1789年）の頃から正遷宮などの臨時祭礼において、「造り物」が飾られるようになり、近世末期には、等身大の人形を背景とともにつくって祭礼空間を飾ることが流行するようになった。同業者町では、瀬戸物町地蔵会における陶器の「造り物」<sup>11)</sup>や永代浜住吉神社における干物の「造り物」<sup>12)</sup>など、商売物を使用した「造り物」が飾られ、一種の立体看板の役割を果たしていた。

このように各地で近世から続く「造り物」がある中で、神農祭の「造り物」は、明治初頭の1880（明治13）年に薬種商の下部組設立を記念して始められた。下部組とは、取り扱う薬種や業態ごとのグループのことであり、開成組（洋薬の元売問屋。永久組から始まり一時出品組とも称す）、商栄組（和薬の元売問屋）、栄盛組（和薬問屋）、開栄組（和薬仲買）、住吉組（洋薬仲買）、薬正組（店売問屋）がこれにあたる<sup>13)</sup>。当時、道修町の各商店は畳敷の店で営業しており、街路に面して店を構えていた。神農祭の当日は、等身大の竹細工の人形に漢方の薬草で装飾した「造り物」を畳間に飾り、有名な昔話や伝承の一場面を再現した。この神農祭の「造り物」は「薬草人形」と呼ばれ、初年度の1880（明治13）年には、角座の当たり狂言「石山軍記」から「夫々顔似せ」の「造り物」6体が組ごとに組合員の店に飾られた。その詳細が『道修町文書』の「明治十三年十一月吉良御祭典諸事控簿」に記されている<sup>14)</sup>。

今般当商之内各組合存立相成候様然而は御際（原文ママ）典ニ至り右図人気打寄諸組合毎ニ壱ヶ所造り物献上相成則左〔本稿では下〕ニ記ス。（中略）

- 一 猫踊ニ小僧人形 場所 成尾氏納屋 開栄組
- 一 鈴木孫市鯉蹴踊人形 場所 高橋氏店 住吉組
- 一 権四良人形 場所 小寺孝氏店 栄盛組
- 一 通天橋にて芸妓ノ人形 場所 安達氏店 永久組
- 一 竹ニ虎 場所 吉田裕氏店 出品組
- 一 蒸気船鳴物一式 場所 小彦氏店 商栄組

（〔〕内は筆者加筆）

1880（明治13）年11月20日付の大阪朝日新聞にも、

「来る廿二廿三の両日道修町の薬種商所に於て神農の祭典を行ふよし当日は生花其他造り物等を数多拵へると云ふから定めて賑はしき事たらん」<sup>15)</sup>

と記されており、「造り物」による賑わいの創出が期待されていた。

こうした「造り物」の出品は、薬祖講の講則によって規定されていた。1884（明治17）年の「薬祖祭例規」には、「(3) 祭礼周旋人は世話掛りと協議の上、提灯その他の準備・修理、当日神前の装飾・造り物の管理等をおこなう」、「(4) 造り物は道修町一丁目から三丁目に五ヶ所設置。費用は一ヶ所につき一〇円で合計五〇円」、「(10) 祭礼当日は仲間仲仕から若干名を選んで集会所表番・造り物番・下足番・諸配り物等をさせる」<sup>16)</sup>などと記されている。さらに、「造り物」の題材は、公募されることもあった。その応募規定によると、1904（明治37）年は、「一 時局問題 式ツ、一 ポンチ 壱ツ、一 時代狂言 壱ツ、一 新聞小説 壱ツ」<sup>17)</sup>、1905（同38）年は、「一 日英同盟 壱ツ、一 講和事件のポンチ 壱ツ、一 凱旋 壱ツ、一 時代狂言 壱ツ、一 新聞小説 壱ツ」<sup>18)</sup>、1907（同40）年は、「一 面白キ出来事、一 ポンチ、一 時代狂言、一 新聞小説」<sup>19)</sup>が題材として募集され、優等な5案には景品として久留米縞1反が進呈されるなど、「造り物」は一般大衆も巻き込んだ娯楽となっていた。

『大阪薬種業誌 第4巻』には、1903（明治36）年の「造り物」の題材を募集した際の応募規定が記載されており、そこには、

「拝啓、少彦名神社祭典余興造物ノ義、本年ハ伏見町戎神社造物モ立派ニ致居ラレ候ニ就テハ当道修町モ例年ヨリ一層意匠ヲ凝ラシ賑ハシク仕度候ニ付、各位ノ御賢慮ヲ煩ハシ造物、左ノ方法ニ依リ募集致候ニ付、御賢慮ノ上精々御提案有之度希上候」<sup>20)</sup>

と記されている。この年、伏見町の戎神社の祭礼<sup>21)</sup>で展示された「造り物」が立派であったため、道修町においても例年より一層「造り物」の意匠を凝らしたいとの意向があったことが分かり、近隣の同業者町の「造り物」を意識した薬祖講が、神農祭の「造り物」に創意工夫を加えていったことがうかがえる。

このように、明治初期の1880（明治13）年に始められた神農祭の「造り物」は、「薬の町」道修町を象

徴する新たな名物として、明治期の祭礼を盛り上げたのであった。

### 3. 明治末期～昭和初期の神農祭と「造り物」

明治期に始められた神農祭の「造り物」であるが、大正期に入ってもその盛況振りは変わらなかったようである。香村菊雄の風土記には、次のような記述がある。

「一丁内に一軒ほどの割合で、店の間に、人形を作って飾っていた。人間と同じくらいの大きさで、「桜井の別れ」だとか「保名物狂」だとかを表している。顔は人形であるが、書いているものや持っているものは、すべて薬種の草根木皮を素材にしてうまく作られていた。これは神農さんの名物で、毎年ちがった人形が造られるので、見てまわるのがたのしみだった。大勢人だけかりがして、「あの鎧は甘草とゼラチンで、手甲はセンブリで、沓は肉桂や」とか言いながら、巧みに考案してあるのを感じていた」<sup>22)</sup>

また、『薬石新報』には、神農祭の時期に発行される紙面にその年の「造り物」の題材が掲載されている。それを一覧にしたのが表1である。明治天皇の崩御



図1 1917 (大正6) 年の神農祭<sup>24)</sup>



図2 1917 (大正6) 年の神農祭に飾られた「造り物」<sup>25)</sup>

(1912 (大正元) 年) や関東大震災 (1923 (同12) 年) によって「造り物」の出品が自粛された年もあったが、神農祭の「造り物」は、毎年恒例行事として定着し、1942 (昭和17) 年まで出品が続けられた<sup>23)</sup>。

次に1907 (明治40) 年、1913 (大正2) 年、1920 (大正9) 年の『薬石新報』の記事を確認することによって、神農祭における「造り物」の変遷をみていきたい。

1907 (明治40) 年11月25日付の『薬石新報』の記事には、同年に出品された「造り物」の材料が詳細に記載されている。「造り物」の題材には、当時上演されていた狂言や連載されていた新聞小説が採用され、人形師によって制作されたことが分かる。

【1907 (明治40) 年11月25日『薬石新報』】<sup>26)</sup>

道修町の薬神祭

因みに本年の造り物は角座の狂言「土屋主税」中座の狂言「熊谷陣屋」弁天座の狂言「塩原多助馬の別れ」朝日新聞連載の「日本大宝庫」の内金鉾発見、毎日新聞の小説「石川五右衛門」の内小密茶門破り等にして何れも人形師竹田良助の妙技成り左 [本稿では下] の各種材料を用ひて以って道修町の色を示したり

金鉾発見：(ボート) 黄柏 (草) 箱根草 (鶴くび) 水犀 (人) 薬瓶、ニンニク、牛膝、糸瓜 (天幕) 葉袋 (水) ガーゼ (金鉾) 唐大黃

塩原多助：(馬) なんば黍 (馬のたて髪) 穀精草 (芒)

箱根草、馬鞭草 (手綱) 晒楽白皮 (馬の爪) 唐大黃

小密茶：(槌) 鉛糖樽 (槌の柄) 木通 (念珠) 白刀豆 (門の紙鉾) 切橙 (石) コロンボ (鎧) 土鼈甲 (手足) 糸瓜 (小手躰当) 膠 (たすき) 桑白皮

土屋主税：薬品ボテ数々

熊谷陣屋：(柱及椽先) 肝油ボテ (制札) 膠 (襖の引手) サックバルのボテ (草) 乙切草 (小石) コロツブ屑 (垣) 木賊

(□ 内は筆者加筆)

1913 (大正2) 年11月25日付の『薬石新報』の記事には、同年の「造り物」に祭典委員長の島道素石による俳句が添えられていたことが記載されている。「造り物」は、狂歌と組み合わせて展示されることが一般的であり<sup>27)</sup>、神農祭の「造り物」もそれに倣っていたと考えられる。図2の写真においても、「造り物」の隣に俳句が添えられていることが確認できる。

【1913 (大正2) 年11月25日『薬石新報』】<sup>28)</sup>

道修町の薬神祭

表1 明治末期から昭和初期の神農祭の「造り物」

年	題材
1907年 (明治40年)	角座の狂言「土屋主税」、中座の狂言「熊谷陣屋」、弁天座の狂言「塩原多助馬の別れ」、朝日新聞連載の「日本大宝庫」の内金鉞発見、毎日新聞の小説「石川五右衛門」の内小密茶門破り等
1909年 (明治42年)	楠公夫人の正行卿訓戒、破戒曾我の箱王丸、銭屋五兵衛無人島漂着、キツチナー元帥の歓迎、ハイカラ美人の滑稽
1911年 (明治44年)	かちかち山、南極探検、紅葉狩、桃太郎、目下の上海
1912年 (大正元年)	諒闇中のため休止
1913年 (大正2年)	嵯峨野（仲国小督の琴の音を聴く）、うづまき（朝日小説）、虎住む国（和藤内）、豊稔（稲刈）、羅生門……今ならば（飛行機に乗った渡邊綱）
1914年 (大正3年)	仙台萩（綱吉公の高尾殺し）、青島、豊臣秀康、提灯行列、高台（仁徳天皇）
1915年 (大正4年)	大毎所載「宮本武蔵」、御大典に因む「養老瀧」、「女天下」、大朝所載「楠正成」、「日独少年の戦」、「天の岩戸」など
1916年 (大正5年)	狐釣り、大朝所載小説水戸黄門、飛行機と潜航艇、忠臣蔵茶屋場、大毎所載小説毒草、那須与市扇の的
1919年 (大正8年)	平和舞踏、素戔鳴尊大蛇退治、金剛荘（大朝小説）、鍋島騒動（大毎講談）、花咲爺、朝妻船
1920年 (大正9年)	藤十郎の恋、フキルム人形、千代萩御殿、兎の洗濯粉、道修児島高德、宮島社頭、神崎与五郎吾妻下り
1921年 (大正10年)	先代萩、フキルム宣伝、信太の森、二見の浦、産土神詣、当世美人館
1923年 (大正12年)	関東大震災による遠慮のため休止
1927年 (昭和2年)	鳴戸秘帖、日本武尊、駆虫薬宣伝、八重垣姫、夜討曾我
1928年 (昭和3年)	養老、小清正、万歳楽
1929年 (昭和4年)	紅葉狩、羽衣、浦島、桶狭間
1930年 (昭和5年)	曾我兄弟、橋弁慶、天の岩戸、ラヂオ狂
1932年 (昭和7年)	艦船模型、馬占山の最期、肉弾三勇士、浦島太郎

注)『薬石新報』が現存しない年や「造り物」に関する記載が見当たらない年は省略した。

予報の造り物は左記〔本稿では下記〕五ヶ所に設けられて薬材応用の妙技は同町の特色を放てるに両日共稀有の好晴なりし事として近來稀なる群衆を来し寔に美しくも賑々しき大祭なりき

造り物（孰れも祭典委員長島道素石君の俳句を添へたり）

嵯峨野（仲国小督の琴の音を聴く）：笛琴に虫つるゝ軒の月夜にて

うづまき（朝日小説）：水に落ちて渦にまかるゝ木の葉哉

虎住む国（和藤内）：虎もふすかくあらむ東海の菊

豊稔（稻刈）：秋の山の晴れ仰ぐ裾田鎌入れて

羅生門……今ならば（飛行機に乗た渡邊綱）：鬼が眼に恋しき腕や時雨雲

（□ 内は筆者加筆）

1920（大正9）年11月30日付の『薬石新報』の記事には、同年から「造り物」の材料として、薬の原材料である薬種そのものではなく、企業や商店の商品（加工された製品）が使われることになり、商品宣伝を兼ねた広告物として、企業や商店が競い合って「造り物」の意匠を凝らすようになったことが記されている。

【1920年（大正9）年11月30日『薬石新報』<sup>29)</sup>

道修町薬神祭（造り物数々）

例に因りて全町数ヶ所に技巧を極めたる造り物あり、尤も本年より薬祖講自慢の薬材応用のものは廃止され個人の広告に供用せらるゝ事となりし為め競争的に意匠を凝らして遥かに美観を加へたるにぞ一層観衆の足を駐めしめたり、即ち如左〔本稿では下〕

道修町三丁目〔○の中に五の字〕商店荷造場には 伊藤眼鏡肝油本舗の「藤十郎の恋」

浪花座附大道具師長谷川小芳と細工師人形新の技工に成り雁次郎と福助の似顔は最も佳

尚ほ観衆中の儿女等に厚紙の眼鏡を筐に付けて奥へたるは一趣向なりし

同所三休橋東谷山商店には 谷山製薬所の「フィルム人形」

美人が洗濯糊フィルム使用の有様を電気仕掛にて美しく示す

同町二丁目丸善薬店には 株式会社乾卯商店の「千代萩御殿」

竹田龍翁作の人形にて同店発売の粉末乳ラクトーゲ

ンを利かす

同所島田商店には 東谷商店の「兎の洗濯粉」

現品を巧に配置せり

同町堺筋角清水商店には フチゾール岸田市商店の「道修児島高德」

敢勿難病悲、時非良薬無 と岸田主人公自らの名案同町八百屋町角には 藤澤樟脳本舗の「宮島社頭」

宮島廻廊の油絵に電気仕掛の音楽入観眼鏡を配して大人気

尚ほ同店には抹茶席の設備及び素人浄瑠璃会等ありし由

同町一丁目杉村房商店には 伊藤眼鏡醋酸本舗の「神崎与五郎吾妻下り」

酢蛸で啖呵はよくキゝたり

（□ 内は筆者加筆）

第一次世界大戦期（1914～1918年）には、医薬品の輸入の途絶と政府の国産奨励策により、日本国内の製薬業は著しく発展し、道修町の薬種商も郊外に工場や研究所を開設し、製薬業に進出する事例が増加した。道修町の薬種商は、それまで薬種業者への卸売業を営んでいたため、一般客への広告宣伝の必要はなかったが、卸売業から製薬業への業態の変化に伴い、広告宣伝を目的として「造り物」が利用されていったと考えられる。

このように、明治期に薬種商の下部組の出品により始められた祭礼の「造り物」が、明治末期から昭和初期の医薬品産業の近代化の中で、企業や商店の広告物へと変容していったことは、近代の医薬品産業における業界構造の再編過程を知る上で注目し得る。

#### 4. 結論

本稿では、『道修町文書』のほか、『大阪薬種業誌』、『薬石新報』など、これまで紹介されていない資料にもふれながら、明治期に登場した神農祭の「造り物」が、道修町の「薬の町」としての地域の独自性、すなわちローカル・アイデンティティの形成にどのように寄与したのかを明らかにした。

明治初頭の神農祭は、露店や参詣者が極めて少ない小規模な祭礼であったが、1880（明治13）年に薬種商の下部組設立を記念して薬品関係の品々を用いた「造り物」を商家の店の間に飾り始めた頃から、祭礼の様相も次第に一般大衆参加の祭礼へと変化したことを確認した。これは、薬種商有志が設立した神社の崇敬者団体である薬祖講が、他の同業者町の事例にあやかり、薬草などを用いた人形を飾り、多くの見物人を

集め、祭礼を盛り上げようと意図したことが考えられる。また、明治期の「造り物」は、株仲間が解散された後、流通機構を担った薬種商の下部組における組ごとの結束を促す側面があった。

明治末期から昭和初期の神農祭に関しては、『薬石新報』の記事に基づき、「造り物」の題材や設置場所、材料などの実態を明らかにした。1920（大正9）年からは、それまでの薬の原材料である薬種そのものを使った「造り物」は廃止され、企業や商店の商品（加工された製品）が使われることになり、商品宣伝を兼ねた広告物としての要素を含むものとなっていった。これは、業者中心に対応していた業界の業務内容が変化し、

一般客への宣伝の必要性から多くの参詣人を意識した結果、もたらされた祭礼の変化であると考えられる。明治期の卸売業を中心とした道修町の医薬品産業は、明治末期から昭和初期にかけて製薬業者を中心とした業界構造に再編され、「造り物」の材料や展示主体にも変化をもたらした。

このように、道修町の薬種商は、急速な医薬品産業の近代化とそれに伴う競争原理にさらされながら、神農祭の「造り物」を含む祭礼そのものを通じて、同町の「薬の町」という地域の独自性、すなわちローカル・アイデンティティを保持してきたと考えられる。

## 【注】

1. 近代には、「薬祖祭」、「薬神祭」、「薬祖神祭」などとも呼ばれていた。本稿では、現在一般的に使用されている「神農祭」を用いることとする。
2. 大堀研（2010）「ローカル・アイデンティティの複合性：概念の使用法に関する検討」『社会科学研究』第61巻第5・6合併号
3. 内田九州男（1993）「薬種中買仲間と道修町」『道修町文書目録—近世編—』道修町文書保存会
4. 薬種中買仲間は、1780（安永9）年に京都の五條天神社から少彦名命を勧請し、従来から信仰されていた中国の薬祖神である神農とともに仲間寄合所に合祀するようになった。
5. 薬種中買仲間解散後に設立された薬種商の同業組合の名称は、1874（明治7）年に薬種商組合、1880（同13）年に薬種商問屋中買仲間、1894（同27）年に大阪薬種卸中買商組合へと変更されているが、本稿では、便宜上「薬種商組合」で統一することとする。
6. 道修町資料保存会蔵「薬祖講設立趣意書」（801005）
7. 島道素石（1932）「道修町薬祖神祭」『郷土研究 上方 第二十三号』上方郷土研究会
8. 「道修町回顧談」『薬石新報』1933年11月1日
9. 例祭日に五葉笹につけた「張り子の虎」が流行病除けのお守りとして参詣人に配られた。その配布数は、1874（明治7）年500個、1877（同10）年1,000個、1879（同12）年1,500個、1880（同13）年2,100個、1882（同15）年3,600個、1883（同16）年3,800個、1884（同17）年4,000個と年々増加していった。1986（昭和61）年には、郷土玩具の1つとして、年賀切手の図柄にも採用された。
10. 相蘇一弘（2004）「近世大坂の「つくりもの」一砂持・正遷宮を中心に—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第114集
11. 西横堀川の西側浜筋にあった瀬戸物町（現在の大阪市西区西横堀）では、近世から明治初頭まで毎年7月に地蔵会があり、陶器商が陶器でつくった「造り物」を奉納していた。1872（明治5）年に地蔵会が禁止されると、翌年には新たに神社が創設され、地蔵会は陶器祭へと継承されることになった。現在は、大阪府陶磁器商業協同組合による「火防陶器神社のせともの祭」として、坐間神社（大阪市中央区久太郎町）境内において、祭礼が行われている。
12. かつて永代浜（現在の大阪市西区靱本町）にあった住吉神社の夏祭りにおいて、塩干魚類の問屋仲間が干物でつくった「造り物」を奉納していた。この干物の造り物は、1909（明治42）年に住吉神社が築港に移転したことにより姿を消した。
13. 薬種商の場合、問屋としては元売問屋（大問屋。内外の薬種・薬品を仕入れ店売問屋や注文問屋に販売）・店売問屋（店売屋。注文問屋・医師・薬店・売薬商から受注し元売問屋から商品を買継ぐ）・注文問屋（注文屋。地方から受注し元売または店売問屋から買継ぐ）があるが、いずれも問屋または卸に分類される。一方、「素合」、「鳶」と呼ばれ、店舗はもたず問屋間の仲介をおこなう業者を仲買に分類した。これとは別に明治10年代前半に、薬舗開業試験との関係から洋薬取扱業者と和漢薬取扱業者に分化する傾向が現われた。1881（明治14）年からは、下部組と薬種商組合の親睦を深める目的で新年宴会が企画された。
14. 道修町資料保存会蔵「明治十三年十一月吉良御祭典諸事控簿」（802019）
15. 『大阪朝日新聞』1880年11月20日
16. 道修町資料保存会蔵「薬祖祭例規」（801008）
17. 道修町資料保存会蔵「薬祖神社祭典造り物応募規定」（802152）
18. 道修町資料保存会蔵「薬祖神社祭典造り物応募規定」（802157）
19. 道修町資料保存会蔵「薬祖神社祭典余興造り物募集規定」（807178）
20. 大阪薬種業誌刊行会（1941）『大阪薬種業誌 第4巻』大阪薬種卸中買商組合事務所
21. 道修町の北の隣町にあたる伏見呉服町（現在の大阪市中央区伏見町）には、かつて洋反物を扱う呉服商が集住しており、同町の守護神であった戎神社（恵美須神社）の祭礼では、呉服を使った「造り物」（呉服人形）が飾られた。戎神社は、1907（明治40）年の神社合祀令により、御霊神社（大阪市中央区淡路町）の境内に遷座した。
22. 香村菊雄（1986）『定本船場ものがたり』創元社
23. 戦後の神農祭において、「造り物」の出品が再開されることはなかった。
24. 薬業往来社（1954）『道修町』
25. 前掲24)

26. 「道修町の薬神祭」『薬石新報』1907年11月25日  
27. 岩間香・西岡陽子編(2008)『祭りのしつらい 町家とまち並み』思文閣出版  
28. 「道修町の薬神祭」『薬石新報』1913年11月25日  
29. 「道修町薬神祭(造り物数々)」『薬石新報』1920年11月30日

【参考文献】

- 網島聖(2018)『同業者町の研究』清文堂  
安士昌一郎(2015)「製薬企業へ発展した薬種問屋：大阪道修町における薬種業者の変遷」『法政大学大学院紀要』第74号  
大堀研(2010)「ローカル・アイデンティティの複合性：概念の使用法に関する検討」『社会科学研究』第61巻第5・6合併号  
加藤紫識(2007)「医薬品業界における同業神信仰—道修町薬種商たちの信仰の維持組織—」『東洋大学大学院紀要』44集  
川端直正(1974)『靱の歴史』野村修造

- 小林公子(2008)「道修町と神農祭—都市同業組織の信仰」『歴史民俗資料学研究』第13号  
香村菊雄(1986)『定本船場ものがたり』創元社  
武田尚子(1999)「地域のアイデンティティの形成」『社会学評論』第50巻第3号  
張文遠(2013)「大阪道修町薬種問屋塩野義商店の製薬会社への発展について」『経済史研究』16巻  
道修町文書保存会編(1995)『道修町文書目録—近代編(下巻)—』  
山下麻衣(2010)『医薬を近代化した研究と戦略』芙蓉書房出版

【謝辞】

本稿を執筆するにあたり、金沢大学医学図書館ならびに神戸大学社会科学系図書館には、『薬石新報』の資料調査で大変お世話になりました。また、くすりの道修町資料館館長の深澤恒夫氏には、『道修町文書』の閲覧に際して貴重なご助言をいただきました。末筆ながら厚く御礼申し上げます。

(大阪公立大学大学院文学研究科 UCRC 研究員)

【2023年8月27日受付／2023年11月5日受理『都市文化研究』編集委員会】

## Local Identity Formation in a Modern Urban Festival: A Case Study of Cultural Transformation of “Tsukurimono” at the Shinno-sai Festival in Doshomachi, Osaka

Takuya HISAMOTO

This study aims to clarify how the local identity of a pharmaceutical industrial district was formed by a contemporary urban festival. This was done by reviewing materials concerning the Shinno-sai festival, an annual festival at the Sukunahikona Shrine in Doshomachi, Osaka.

Results showed that the festival, which had been attended by medicine dealers in the early Meiji era, transformed into a social festival with public participation after “Tsukurimono” began to be displayed in 1880. It was thought that the Yakusoko, a group of worshippers at the Sukunahikona Shrine, which had been established by medicine dealers, intended to gather participants and liven up the festival by displaying fabricated objects made of medicinal herbs. The “Tsukurimono” also encouraged the unity of each group of medicine dealers after Kabunakama was dissolved.

The actual conditions (subject, location, materials, etc.) of the “Tsukurimono” from the late Meiji era to the early Showa era are also clarified based on the article “Yakuseki Shimpō.” “Tsukurimono” using medicinal herbs were discontinued in favor of advertisements for the company and store products starting in 1920. This may have resulted from a change in festivals brought about by the need to advertise to the public following the transformation of the pharmaceutical industry. The pharmaceutical industry in Doshomachi was reorganized from wholesalers to manufacturers, which led to changes in the materials and exhibitors of “Tsukurimono”.

The results suggest that “Tsukurimono” from the Shinno-sai Festival played a role in expressing the local Doshomachi identity, which enabled medicine dealers to remain a united and organized group during a period of rapid modernization in the pharmaceutical industry.

Keywords : Doshomachi, Shinno-sai Festival, urban festival, Tsukurimono, local identity